

保育かながわ

発行所
横浜市神奈川区沢渡4の2
神奈川県保育会

発行人
都 築 融 光

題字
故内山岩太郎筆



平成二十年十二月十二日金曜日に、横浜ベイシエラトンホテル&タワーズ 五階「日輪」において、保育の日前夜祭が約百三十名の参加の中、神奈川県保育会主催で行われました。

例年より一週間遅れで開催されます「神奈川県保育の日」を翌日に控え、保育関係者の皆様が一堂に会し、この一年の保育功労受賞者の皆様をお招きしてお祝いするとともに、

保育の日 前夜祭

日ごろ保育業務に専念されている職員の皆様方のご労苦をねぎらい、保育事業のより一層の進展に資することを目的として開催されました。

開催にあたり、宮田副会長の開会挨拶の後、都築会長より主催者の挨拶がありました。

その中で、「保育所の役割のレポート」が広がっている現場において、将来を担う子どもたちのために、ご苦労様でした」との労をねぎらう言葉と「これからも子どもたちのために、後進の指導にも努めていただきたい」との励ましの言葉がありました。

今年度の神奈川県保育賞を受賞される四名に都築会長から花束が贈呈されました。

- 大和市草柳保育園
- 伊藤 美枝子 様
- 横須賀市しらかば保育園
- 工藤 久仁子 様

相模原市すこやか保育園

長谷川 友紀子 様

愛川町中津保育園

平川 晴美 様

また、厚生労働大臣表彰を受賞し出席された方々に、宮田副会長から花束が贈呈されました。

横須賀市三和保育園

安藤 多津子 様

横須賀市善隣園保育センター

内山 和子 様

茅ヶ崎市梅雲保育園

小室 やゑ子 様

大和市福田保育園

坂本 直子 様

横須賀市大楠愛児園

佐藤 蘭子 様

小田原市上府中保育園

都築 融光 様

開成町酒田保育園

露木 省子 様

南足柄市華綾保育園

橋本 則子 様

小田原市小田原乳児園

渡邊 澄江 様

ご臨席いただいた二十名の来賓の皆様を代表して、神奈川県保健福祉部子ども家庭課 芝山課長、神奈川県児童福祉

審議会 松田委員長、保育のつどい運営委員会 小川委員長、ゆりの会富米野会長から、お祝いのお言葉をいただきました。

来賓の皆様を紹介後、オペラ歌手 飯田裕之・麻衣子ご夫妻によるアトラクションが始まりました。

奥様の美しいピアノの伴奏で、バリトンの歌声が会場いっぱい響き渡り、楽しいトークを交えてのプログラムに、アンコールの曲が終えても会場は、明るく楽しい雰囲気包まれていました。

懇親会は富田顧問の「和やかな声に溢れ、若い人をたくさん育て、児童福祉の神奈川が光り続けるように」との言葉を添えての乾杯の発声により、祝いの雰囲気の中で、相互に親交を深め合いながら進められ、相馬副会長の閉会の言葉で終了することができました。

受賞者の皆様とともに、社会の変動の中でも、子どもたちの最善の利益のために尽くしていきたいと思われました。



(三) 必要なときに利用できる多様なサービスの整備等、の説明がなされました。④保育指針改定として、分科会で活発な研究発表がされることを前提に、改定の背景や内容の説明等があり、全体的に丁寧な説明がなされました。

引き続き、小川全国保育協議会会長から「保育をめぐる動向と全保協の取り組み」と題して、基調報告がありました。平成二十年九月五日付で公表された、次世代育成支援の社会的基盤の整備への意見や、以前に実施された全国の保育所実態調査を元にこれからの取り組みや組織強化の重要性等についての話がな

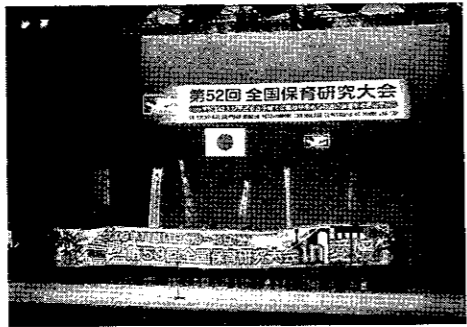
され、一日目を終了しました。二日目は、上着がないと寒い程のどんよりとした曇り空の中で分科会が行われました。一から七までのカテゴリーの中に、十三の分科会が設定され各会場で熱心な研究討議が行われました。その中の第十三分科会(フリー発表分科会)で最後の発表を飾ったのは、神奈川県から横須賀市善隣園保育センター分園こぼと園の飯塚裕子主任保育士より「低月齢児の保育について」分園こぼと園の実践・家庭的な保育を目指して」とのテーマで発表がなされました。こぼと園の素晴らしい取り組みを全国大会と言う大舞台の中で堂々と発表される姿に尊敬し、感銘いたしました。

最終日は、記念講演が行われ、「詩に思いをのせて」とのテーマでアーティストの世良公則氏に講演をいただきました。生い立ちや実母が保育士であった事。今、子ども達に人気がある事など、面白可笑しくお話をいただきました。その後、次回開催地の愛

媛県からのあいさつに続き、閉会のことばにより全日程を終了しました。三日目も非常に良い天気恵まれ、結局傘をいらす。園への重いお土産を引きずり、午後六時半過ぎに新横浜駅に到着いたしました。

媛県からのあいさつに続き、閉会のことばにより全日程を終了しました。三日目も非常に良い天気恵まれ、結局傘をいらす。園への重いお土産を引きずり、午後六時半過ぎに新横浜駅に到着いたしました。

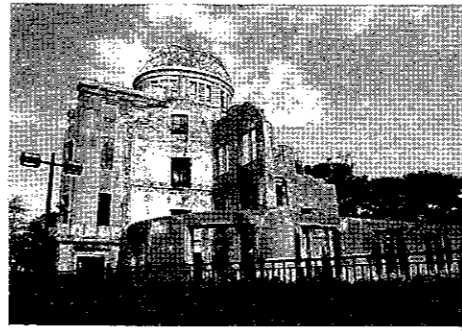
なお、第一日目の終了後に保育会主催の「お祝い・激励の夕べ」が現地の広島で行われ被表彰者と発表者にお祝いと激励を行い、神奈川の心強い連携を改めて感じました。また、広島は「存じの通り被災地です。タクシーの運転手さんに復興等の変遷をお聞きし、胸が痛くなるとともに、今、平和に過ごせる事に感謝する三日間ともなりました。



第52回 全国保育研究大会

～すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現を目指して～

(広島県 広島市)

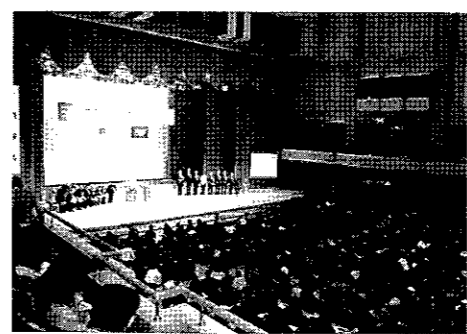


午前七時〇九分、新横浜駅発の新幹線のぞみ号に飛び乗りました。途中、遅い朝食を済ませた辺りで雲行きが怪しくなり、折り畳み傘を忘れた事に気付きましたが、天気予報を確認すると大丈夫そう。臀部が大分痛くなってきた約四時間後に七つ目の駅「広島」に降り立ちました。広島駅からは、路面電車に乗り原爆ドーム前で下車。良いお天気の中、そのドームの横を原子爆弾の脅威を感じつつ通り過ぎ、徒歩で一〇分ほどかけ、無事に会場入りすることが出来ました。

平成二十年十月三十日～十一月一日の三日間、広島市の

和記念公園内にある広島国際会議場をメイン会場とし、第五十二回全国保育研究大会が盛大に行われました。参加人数は、二千余名の人数で会場は入りきれず、建物内の隣接したヒマワリホールでモニターでの参加形態があるほどの開催となりました。

一日目の開会式は、地元実行委員長によるあいさつに続き、児童憲章の朗読、物故者への黙祷。主催者である小川全国保育協議会会長、小林全国社会福祉協議会副会長からそれぞれのあいさつの後、来賓者からの祝辞がありました。続いて表彰が行われ、会長特別感謝を含めて全国で三百名の方が表彰され、神奈川県からは七名の方が栄誉ある会長表彰を受けてその功績が称えられました。合わせて、保育活動専門員認定授与式も行われ、全国で九十一名の方、神奈川県からは三名の方が授与されました。また、討議資料内に第八期保育所長専門講座の修了者一覧が掲載され



ており、全国で四十五名の方、神奈川県では一名の方が修了されておりました。表彰や認定並びに修了された方々には、敬意を表しますとともに心から御祝い申し上げます。開会式の最後には次世代育成支援策拡充に向けた大会アピールが読み上げられ、全参加者の熱い拍手により採択され開会式が終了いたしました。



大いに意を強くした次第です。」との心強い言葉を頂戴し説明がはじまりました。説明された内容は、①少子化の現状と政府の取組として、少子化の進行と人口減少社会についてや「子どもと家族を応援する日本」重点戦略について説明がなされました。②保育所の現状として、「新待機児童ゼロ作戦」の説明がなされました。その中で、定員を増やしても潜在的ニーズを掘り起こしてしまうので待機児童解消には繋がらないと見込まれるが、三歳未満児へのサービス提供割合を今の倍近くまで引き上げることが大切との見解を示されました。③平成二十一年度予算概算要求主要事項として、(一)認定こども園の設置促進。(二)待機児童解消に向けた保育所の受け入れ児童数の拡大。

次世代育成支援策拡充に向けたアピール

現在、国は、社会保障国民会議や社会保障審議会・少子化対策特別部会にて、すべての子どもの健やかな育ちを「未来への投資」とし、保育・子育て支援から社会的養護体制まで、質の確保と量を拡充する、新たな次世代育成支援の枠組みを構築しようとしています。21世紀時代にふさわしい子ども家庭福祉の拡充のため、国は最重要政策としての財源確保のもと、地方自治体とともに、「子どもの育ち」、「子どもの最善の利益を」前提に、新待機児童ゼロ作戦を推し進めるべきです。

一方、規制改革会議等は、保育制度に市場原理を導入させ、量を確保するとの主張を繰り返しています。私たちは、市場原理導入とそれにもとづく直接契約等に強く反対します。

子どもの育ちと子育て支援を担っている私たち保育関係者は未来へ向かって子どもたちの健やかな育ちを守り、社会全体で「すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現」をすすめるものとし、第五十二回全国保育研究大会のアピールをいたします。

- 一、私たちは、未来を担う子どもの最善の利益を守るため、保育と子育て支援を市場原理に委ねる動きに反対します。
- 一、私たちはすべての子どもの育ちを保障する総合的な次世代育成対策に社会全体で取り組む必要を、国民に向け呼びかけ、理解と協力を求めます。
- 一、私たちは「子どもの育ち」を主体とした保育・子ども家庭福祉制度を堅持し、国の責任による基盤整備の拡充を、実現させていきます。
- 一、私たちは「子ども」を主体とした保育の質と量の確保、とくに新たな次世代育成支援の枠組みのもとに最低基準や保育士等の労働条件等、保育環境の質的改善を表現させていただきます。
- 一、私たちは、すべての子どもの健やかな育ちが保障されるようにGDP比〇・七五%と少ない家族政策関連財源を、大幅に増やすよう、国と地方自治体をはじめ、広く社会に訴え、実現させていきます。

平成二十年十月三十日

第五十二回全国保育研究大会

保育専門講座Ⅲ これからの保育運営

平成二十一年二月二十四日、

神奈川県社会福祉会館において、新宿せいが保育園園長、

藤森平司氏による「これからの保育運営」をテーマとした講義を聴くことができました。

午前は、改定保育所保育指針をどう受けとめるか、保育の現状を振り返りながら、実践にどうつなげていくかが主な内容でした。改定の背景にある大きな要因として、①少

子化からくる人の関わりの変化、②コミュニケーション不足、③保護者の養育力の低下、



などが指摘されました。

藤森先生の講義の要約として、保育所指針が改定され、

保育を見直す大切な視点として、保育園が一方から保育をするのではなく、広い視野を持つて、多方面から子どもの育ちを見ることが大切であると提言されています。

子どもの育ちが、社会的・人為的に多くの刷り込みがなされ、ゆがめられている現状を整理してみる事も欠かせません。その要因の一つが、早期教育がもてはやされた時代

にあります。多くの親は、詰め込み教育により、知識優先の頭の良い子として育てられてきたのです。そうして、子どもを取り巻く育ちの環境は、テレビや各種ゲームの氾濫によって生活観が変えられ、子

ども集団の遊びが見られなくなっている現実をはつきりと見ることができません。

これからの保育の中心に据えたい事は、①ひとりひとりが関わり合う集団づくり、②豊かなコミュニケーションの育成、であると考えられます。

こうした保育の指針によって、共生と共感する力を生み、道徳心が育ち、子どもの豊かな

生きる力というものが育まれていくのです。

これから目指していく保育キーワードとしては、「一斉保育・画一的保育からの脱却」が挙げられます。保育士が主導的に引張っていく保育から、どのように変えていくことができるか。子どもが自ら

考え、活動し、多少の失敗はあっても夢中になって遊ぶ事ができる環境をどう整えていくのか。「受身型」から「参加型」へ、「教える保育」から「子ども自ら活動する保育」への発想の転換が必要となつてき



ています。

0歳から就学までの子どもの発達をきちんと捉える事、

親の仕事と育児の両立を支援する事に加え、人と関わる力

をつけ、自立をしていく基礎を培う場になっていく事が求められているのです。

午後は、午前の内容を踏まえ、保育の在り方を学びました。中でも目を引いたのは、

施設内のコーナーからゾーンへの発想でした。年齢の垣根を越え、発達に合わせて環境を整備し保育室を、子どもが

自ら周りに働きかけやすいように考えています。

寝返りゾーン、ハイハイゾーン、たっちゾーンは色彩を赤を主流にしてあり、触る・つまむ・めくるなどの遊具が中心です。食への関わりゾーン、お昼寝ゾーンは黄色が主流で、社会性の芽生えゾーンでは、常に円形のテーブルを使用して、集団意識を高めて

いました。

また、基本的習慣の自立ゾーン、ブロックゾーン、伝承遊びゾーン、製作ゾーン(木工)、表現ゾーン(変身できる)、科学ゾーン(文字や数)など、

この頃の色彩は緑、さらに大きくなるにつれ水色が使われていて、一人一人が内面と向き合いやすい環境に変わっていました。

今回の研修を受け、全ての子どもたちの将来を考え、意欲的に遊びに没頭することができる保育園をめざしたいと思いました。

食育研修会

平成二十一年一月二十三日
神奈川県社会福祉会館二階に
おいて「食育研修会」が開催
されました。

午前中は、「心とからだを健
やかに―幼少期における食育
のポイント」をテーマに国家
公務員で食と環境教育アドバ
イザーの中尾卓嗣氏の講演を
聴きました。

先生は、芸名「うんち博士」
としても知られ、今回も「象
のうんち」をはじめライオン
の歯、米、油、野菜などユニ
ークな教材が並び、興味津々
の中、環境・食問題など自ら
の体験を交え時折、質問を授
げかけながら熱心な関西弁の
喋りで講演が行われました。

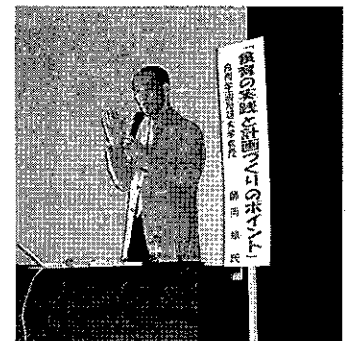
生物は、食料を得て生き抜
くための進化の過程で様々な
選択がある。動物では、歯が
その一つであり咀嚼の状況に
よりうんちも違ってくる。
食べる事は、生きるため

も自然界では、誤って食べる
事は、死を意味し安全という
情報が必要となる。親が周辺
で食べているから子どもも食
べる。この繰り返し食習慣
食文化となる。

「空腹は、最上のソースな
り」空腹を導くのは、運動と
我慢、我慢の後においしいと
言う極上のプレゼントが与え
られるこれが教育(しつけ)

の原点である。子どもを不幸
にする一番確実な方法は、い
つでも手に入るようにする事。
この言葉は、飽食で物があ
ふれている現在、大人にも言
えることである。

また、私たちは、野菜が種
になるまでの途中で収穫し食
べている事の話の中で、人間
は生き物の命をいただきなが
ら生きている事や食べ物の大
切さ、ありがたさについて、
子どもたちにじっくり考えさ
せ体験させながら伝えていく



事が食育の基本であるという
事を学びました。

食育の根底は、愛情である。
私達は、次世代を生きる子
どものために、豊かな自然と
資源、そして「心」と「文化」
を残し伝えていく必要がある

食と子育ての深い関わりをも
う一度考えていかなければな
らないと話され、最後に「地
球は、先祖からの授かり物で
はなく子孫からの預かり物な
のです」と大変意味深いメッ
セージを残して講演を終了し
ました。

その後、都築会長より給食
から食育研修会になった経緯
についてと調理員と保育士が
連携することにより子ども達
は楽しい給食を食べる事が出
来るので、一緒に勉強をし有

意義な研修にして欲しいとの
挨拶がありました。

続いて給食問題研究委員会
の横地委員から「食育に関す
るアンケート調査」の内容に
ついての説明がありました。

午後からは「食育の実践と
計画づくりのポイント」をテ
ーマに白梅学園短期大学教授
師岡章氏の研修でした。「保育
所における食育の計画づくり
ガイド」を踏まえて、食育と
は、食を通じた健全育成であ
り幅の広い取り組みが求めら
れ国をあげての国民運動とし
て進められ、保育園はその一
役を担う事を期待されている。

平成二十年度保育所保育指
針改定で指針が大綱化となり、
食育に関しても具体的に述べ
ていないため食育を考え進め
て行くには、指針の把握と食
育に関する指針計画作りのポ
イントを参考に計画し保育所
の食育は、特に大切に極めて
欲しいと話されました。

食育の実践ポイントとして
「つくる」こと「食べる」こ
とのつながりを実感させ、子
どもの姿が見える取り組みを

することが大切で繰り返し
食事の中で、時には変化をつ
け日本の文化を振り返り日常
的なものを大事にしていくこ
とである。

食育計画の考え方として保
育の計画にしっかり位置づけ
「保育課程」と「指導計画」
を食育の視点を含んで組織的
発展的な計画を立てることが
大切であることを学び実際に
幾つかの保育園の食育の計画
書をもとに講演を聴くことが
でき具体的に大変有意義な研
修になりました。



保育園利用者相談室Ⅰ

十一月二十八日に平成二十年度第一回保育園利用者相談室研修会が、県社会福祉会館にて開催されました。今回の講演は、株式会社JTBお客様相談マーケティング室長の下山和生氏を招いて、クレーム対応が企業の存続を左右する時代というところで「お客様の更なる満足と感動を求めて」というテーマでの講演となりました。企業におけるクレーム対応も同じですが、保育園利用者からの苦情についても丁寧で迅速な対応が求められています。一口で「苦情」と言っても、意見・要望から狭い意味の苦情までいろいろですが、苦情がないから良い運営ができていくというわけではありません。苦情があっても、それを適切に対応できるシステムがあれば、その「苦情」が結果としてサービスの質の向上につながり、お客様（利用者）からの信頼とより高いサービスを提供することができます。大切なこととして、潜在化しているお客様のニーズを掘り起こし、具体的な問題を解決す

ることであり、サービスを提供する現場にそのことをきちんとフィードバックするという機能が働いていることです。その仕組みづくりで最も大切なのは、お客様がクレームを言いやすい環境をつくることによるサービスの質の確保に向けた取り組みを進めることです。それぞれの保育園においても「苦情受付担当者」「苦情解決責任者」「第三者委員」を設置し利用者へのサービス運営適正化のシステムを導入している中で、そのシステムが十分に機能していくように努めなければならぬと感じています。お客様との関係づくりの中で、お互いを信頼し、お互いが成長するという意味でも今回の利用者相談室研修会を受講し、改めてクレーム対応の大切さを再確認できました。

保育園利用者相談室Ⅱ

二月二十日(金)に横浜のホテルキヤメロットジャパンにおいて、今年度二度目となる「保育園利用者相談室研修会」が開かれました。参加者は七十二名。午後二時より開始され、開会宣言と相馬副会長の挨拶の

後、八つのグループに別れ、事例をもとに熱心に討論がされました。事例はこの園でもありそうな、着替えの紛失についてです。園児の着替えが園で紛失したため、室内に掲示をして他の保護者に心当たりを探してもらったがみつからず、氏名も書かれていなかった。ので「氏名を書くことが約束になっているのでこれ以上探しません」と保護者に伝えたところ「あまりにも冷たい対応で、園に管理責任もあるのではないかと」ノートに書いてきました。返事にこまり、担任が園長に相談したところ、園長が「これは園の方針です」と保護者に伝えてしまったため、まずまず保護者と園が険悪な雰囲気になりました。さらに、苦情の受付職員は決まっているのに誰がどう対応するか話がまとまらず、対応がのびのびになっていくうちに、その保護者は、「園は逃げている」と他の保護者にも言いふらしているようだといい事例でした。

約一時間をかけ、各グループで、この事例の問題点は何か、考えられる対処法は何か、次に向けて考えなければならぬことは何かの三点で話し合いがもたれました。事例の問題点として出た意見は、「探しません」と言い切ってしまった対応の悪さが親の不信感につながった。「見つかるまで対応する誠意を見せなくてはいけない。」と対応のまずさを指摘する意見や「記名の依頼をその都度して対応すればよかった。」「いつ、どこで、だれが等現状確認をすることが大事ではないか。」と紛失の予防策をあげる意見や、「最初は苦情ではなかったのではないか。約子定規な対応が保護者に冷たいと捉えられ、苦情に変わっていたのではないか。」と保護者の気持ち的分析する意見などができました。考えられる対処法は、「親は何が言いたかったのか、親の気持ちさをさぐりながら、言いたいことを理解する。」「保育士の皆がそのことを知っていて、気にしていることが大切。」「園の誠意の伝え方を考える。」などの意見が出ました。次に向けて考えなければならぬことについては、「なくなったのは園の責任であり、自分たちに責任の自覚を持つ。」

「同じ事を繰り返さないための対策を考える。」「対応を延ばさない。」などの意見ができました。これをふまえ四名の委員の先生から次のようなアドバイスを受けました。小さい子どもの積み重ねが苦情に変わるもの。『初期対応の大切さ』をもう一度見直し、苦情解決のルールづくりを再確認し、まず担当者が対応し、園長が対応することなのかを見極め、最終的に必要があれば園長が動くことが大事。また、その背景には保護者との関わり方が大切で、マニュアルに頼りすぎず、しっかりとした信頼関係を築き、保護者と話し合うことが必要。また、『職員の共通理解と連携』が大切で、保育士によって対応や意見が異なるのではなく、全ての職員が園の方針と目標を理解して保護者の対応にあたるのが大事ということでした。最後に、保護者には「お（おおらかな心）・も（もののおわれを知る）・い（いたわり）・や（やさしさ）り（理解）」をもって接しましょうと、盛大な拍手をもって締めくくられました。

部会報告

総務部

「すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現を目指して」という主題のもと、第四十二回神奈川県保育事業大会が開催され平成二十年年度が出発いたしました。式典終了後、総会が開催され平成十九年度の事業報告及び収支決算、そして平成二十年年度の事業計画及び予算(案)について説明を行いました。

総務部は毎月一回開催される委員会、部会や県保育会長表彰選考委員会、全国保育協会会長表彰推薦選考委員会などの運営を行いました。総務部では今後も引き続き事業計画、予算決算、諸会議、諸事業の総括をはじめ、県保育会各部の円滑な組織運営の補助、財務、運営の全般に関し活動を行なっています。

調査研究部

調査研究部では、各市町村の問題点や全体的な保育制度の運用方法について検討を行

ないました。その中で、地域差が生じているものがあるのではないかと。市町村によって入所に関わる考え方が違うのではないかと。待機児童数によって選考方法が複雑化するのではないかと。その結果、トラブルや苦情の原因となっていないのではないかと、考えられたことから各市町村における入所基準を調べ、その周知方法や、選考基準を分析し比較してみました。そのほか、入所選考のトラブル事例も今後の課題として調査し、結果を後日各市町村に配布したいと考えております。

公立保育所専門委員会

平成二十年公立保育所専門委員会は十六の市や町の参加となりました。毎月、テーマを決め、各市や町の状況を話し合い、情報交換しました。新保育所保育指針が告示され、指導計画や保育内容等見直す時でもあり、各市や町がどのように指針に取り組み、対応しているかその状況を報告したり、統合保育の実情、延長・一時保育について、食

育、植物アレルギー児への対応、臨時職員の雇用と資質向上、異年齢保育、公立保育園の民営化の状況などについて、話し合うとともに、具体的な問題も情報交換することが出来、毎回出席率もよく、時間いっぱい、有意義な委員会となりました。

全国保育協議会の公立保育所専門委員会にも参加させて頂きました。予算の削減、正規職員より多い臨時職員、民営化、待機児、地域格差、などの問題があげられています。難しい問題を抱え、つらい立場ですが、新保育所保育指針を職員が共通理解し、各地域の特性や、これまでに積み重ねてきた保育、保護者や地域の信頼と連携を生かし、子育て支援の更なる要望に応える役割を積極的に担い、子どもたちの幸せのため、保育をしていかなければと責務の重大さを改めて感じました。

保育士会

二十年年度のスタートは、体

育祭の開催場所である防災センターを借りることができなくなったことから始まりでした。毎回県役員会で目にしてきた沢渡中央公園。まさかここで体育祭を行うとは、思ってもみないことでした。体育部は初めての場所で、音響はどうか、トイレは大丈夫か…と心配は尽きず、細部までの打ち合わせを何度も重ね、本番を迎えました。当日は県社協さんの手厚いバックアップの中、幸いなことに曇り空ながら、久しぶりの戸外で、清々しい体育祭を無事に楽しく行うことができました。

そして、県の行政改革に伴っての補助金問題が本格化してきました。事務局が無くなるかもしれないという不安の中、県保育会の在り方検討会(グランドデザイン検討会)にオブザーバーとして参加させていただきました。今後は、県保育士会の在り方を考えなければならぬ時を迎えたことを実感しました。

合わせて『五十周年記念行事』の第一回企画委員会が開

催されました。企画委員は十名の歴代会長さんにお願ひし、会員からの意見を基に検討を重ね、来年度からは実行委員にバトンタッチをします。記念行事に合わせ、『五十周年記念誌』を発刊する予定で、原稿をお願いしているところで

また、研修部では三回の研修会を好評のうちに行うことができました。ミツル&りょうたのお二人には保育の楽しさを、柏女霊峰先生、今井和子先生には新保育所保育指針に絡んだ旬の話を聞くことができ、会員の資質向上に大いに影響したと思われま

す。振り返ると大きな問題や課題の出た一年間でした。しかし、来年度は『五十周年のつどい』を開催するという大きな節目を迎えようとしています。県保育会の皆様には、これまで以上に県保育士会に温かな目を向けていただき、大きな行事が無事に行われますよう、お力をお借りしたいと思っております。一年間ありがとうございました。

給食問題研究委員会

全国給食研究委員会が平成

二十年七月全国社会福祉協議会にて開催され、中尾卓嗣氏の講義「心と体を育む食育」と天野珠路氏の「新保育所保育指針のポイントと食育の関係」の講義やグループ討議を行いました。グループ討議では各都道府県や各保育所における食育への取り組みが話し合われました。

当委員会では、一月実施の食育研修会の講師として、中尾先生のご紹介をさせて頂いただいたり、天野先生の講義を参考に「新保育所保育指針」の第五章、健康及び安全 三、食育の推進について、各園の現状や課題についてアンケート調査をさせて頂いたことになりました。

新保育所保育指針には、(四) 特別な配慮を含めた一人一人の子どもへの対応について「体調不良、食物アレルギー、障害のある子どもなど、一人一人の子どもの心身の状態等

に応じ嘱託医・

かかりつけ医等の指示や協力の下に適切に対応すること」と記されていますが、今回のアンケート結果から様々な問題に各園で取り組んでいる努力が伝わってきました。また、問題点や課題についての研修や研究の必要性も感じています。

今後、新保育所指針の実施に向け、新たな課題について共に学んでいきたいと思っておりますので、研修会への参加やアンケート調査等のご協力をよろしくお願いいたします。

食育に関するアンケート 集計結果

2009. 1. 23 実施

有効アンケート総数 87 神奈川県保育会給食問題研究委員会

食物アレルギーに対する園の対応について

① 除去食の提供をしていますか？

いる	いない	わからない	無回答	
86	0	0	1	

② “いる” と答えた方

除去食を提供する場合、医師の指導・指示により行っていますか？

いる	いない	わからない	無回答	無効
65	13	5	2	2

③ 食物アレルギー除去食の提供について何か悩んでいることや困っていること、また事故事例がありますか？

ある	ない	わからない	無回答	
30	41	7	9	

④ “ある” と答えた方。

その内容について

現在、離乳食での除去食を提供しています。今現在では量が少ないですが、子どもが成長するに従い、メニューの内容や提供料も変えていく必要を感じアレルギー児用の食事の勉強が必要と考えている。勉強会・指導をもらえる場が欲しい。

アレルギーの食物を食べさせてしまった。アレルギー食を別のトレイに配膳し、食事前に職員間で除去食を声に出して確認し、食べている間は職員が後について離れないよう改善した。

医師により判断や考え方が異なり、又、アレルギー関連の研修で聞く対応法と違い、何を信じて進めていけば良いのか分からなくなる。

アレルギー除去により、メニューに偏りが出来てしまうことがある。アレルギーと診断を受けていなくても、アレルギー反応が出てしまい、新しく除去となる物もあり、園でアレルギー反応が出ると適切に十分な対応ができるか不安と心配がある。

*集計結果の一部を掲載しました。

編集後記

三年間という長きにわたり、神奈川県保育会の業務を陰で支えてくれたスゴ腕事務局長の高橋事務局長が、本紙が発行される三月末を持って「卒園」することとなりました。高橋事務局長には、卒園するにあたり広報部として原稿を依頼しましたが、「俺は、一面じゃないと書かん！」(笑) また「拙い文章で大切な紙面を汚したくない」と、一喝されましたので、この様なお知らせとさせて頂いたことになりました。

局長は、初心者マークの保育会委員のわたしに、親切・丁寧色々なことを教えてくださりました。保育会のこと、委員の仕事のこと。そして、保育会員同士の深い絆など数えればきりがありません。この場をお借りいたしました。心から感謝申し上げますとともに、本当に長い間お疲れ様でした。

広報部も無事に一年の活動を終えることが出来ました。みなさまの温かいご支援、誠にありがとうございました。